

天音翔

密室LIVEパラレルストーリー

目次

Parallel1: 握手会の裏側

Parallel2: 堕ちたアイドルの夜の仕事

Parallel3: 撮影現場での誘惑

Parallel4: ファンストーカーとの危険な関係

Parallel5: 同業者との競争と欲望

あとがき

Parallel1: 握手会の裏側

握手会の会場に響く、甲高いファンの声援。天音翔は慣れ親しんだ営業スマイルを浮かべながら、次々と差し出される手を両手で包み込んでいた。相手を失望させるわけにはいかない。アイドルとしての使命感が、疲労した身体を支えている。

「翔くん、今日もかっこいいです！」

「ありがとう。君も素敵だよ」

柔らかな声でそう応えながら、翔の視線は会場の奥を捉えていた。そこには、いつものように彼を見つめる男性の姿があった。田中という名前だったか。握手会には必ず現れ、最後まで残る常連客の一人だった。その視線の熱さに、翔は微かな不安を感じていた。

握手会が終了し、ファンたちが帰路についた後、翔はスタッフルームで化粧を落としていた。鏡に映る自分の顔を見つめながら、彼は小さくため息をついた。営業スマイルを解いた素顔には、疲労と不安が滲んでいる。

「お疲れさまでした」

振り返ると、田中が入り口に立っていた。三十代前半と思われる彼は、地味なスーツを着込み、眼鏡の奥の瞳で翔を見つめていた。その視線には、異常なほどの熱が込められている。

「あ、お疲れさまです。でも、もう握手会は終了しましたよ」

翔は困惑しながらも、相手を不快にさせないように丁寧に応対した。ファンを大切にしなければならない。それがアイドルの基本だった。

「分かっています。実は、翔さんに個人的にお話があつて」

田中の手には、厚い封筒が握られていた。翔の表情が一瞬強張る。

「これは？」

「お礼です。いつも素敵なお時間をありがとうございます」

封筒を受け取った翔は、中身を確認して息を呑んだ。明らかに相場を超えた金額の現金が入っていた。翔の喉が乾く。最近のグループの売上低迷を考えると、この金額は魅力的すぎた。

「こんなに……受け取れません」

そう言いながらも、翔の手は封筒を握り締めている。

「受け取ってください。その代わり」田中の声が低くなった。「少しだけ、お時間をいただけませんか」

翔の脳裏に、マネージャーから聞かされていた話が蘇った。グループの売上は低迷している。このままでは解散も視野に入れなければならない。そんな状況で、目の前の現金は魅力的だった。

「……どんなお話ですか？」

翔は相手の期待に応えようとする自分の性格を呪った。断ることで田中を傷つけるのではないか。そんな心配が判断を鈍らせる。

「ここではなく、もう少し静かな場所で」

翔の喉が音を立てて動いた。彼は封筒を握りしめながら、ゆっくりと頷いた。みんなを失望させるわけにはいかない。それが翔の行動原理だった。

田中が案内したのは、会場から車で十分ほどの場所にあるビジネスホテルだった。エレベーターで上階に向かう間、翔の心臓は激しく鼓動していた。田中の体臭が鼻につく。汗と興奮の匂いが混じった、男性特有の濃い匂いだった。

「緊張してますね」田中が微笑みかけた。

「いえ、そんなことは……」

しかし翔の手は、かすかに震えていた。田中はそれに気づいていたが、何も言わなかった。

部屋に入ると、田中は翔にソファに座るよう促した。自分はその向かいに座り、翔を見つめた。

「翔さん、率直に聞きます。お金に困ってませんか？」

翔の表情が一瞬こわばった。「そんなことは……」

「嘘をつかなくていいですよ。芸能界の厳しさは理解しているつもりです」

田中の言葉に、翔は反論できなかった。実際、アイドルとしての収入だけでは生活が厳しく、アルバイトを検討していたところだった。相手の期待に応えたい気持ちと、現実的な不安が翔の中で渦巻いている。

「僕は、翔さんのファンです。でも、ただのファンではありません」田中は立ち上がり、翔の隣に座った。「翔さんにもっと近づきたい。もっと特別な関係になりたいんです」

田中の手が、翔の膝に置かれた。翔の身体が硬直する。その手は熱く、汗ばんでいた。

「田中さん……」

「お金は十分に用意できます。翔さんさえ良ければ」

田中の手が、翔の太ももを撫で上げていく。翔は身動きが取れずにいた。頭の中で、理性と現実が激しくせめぎ合っていた。断れば田中を傷つける。でも、これは明らかに一線を越えている。

「僕は……」

「無理はしなくていいですよ」田中の声が優しくなった。「でも、翔さんの美しさを、もっと近くで感じたいんです」

田中の手が翔の頬に触れた。翔の肌は、化粧を落とした素の状態でも驚くほど滑らかだった。アイドル時代の丁寧なスキンケアの成果が、こんな形で活かされるとは。

「こんなに綺麗な肌……まるで女性のようにだ」

田中の指が翔の唇をなぞった。翔は目を閉じ、小さく身体を震わせた。相手を喜ばせたいという気持ちと、恐怖が入り混じっている。

「翔さん……」

田中の唇が、翔の首筋に触れた。翔の身体が、かすかに反応する。田中はそれを感じ取り、より大胆になった。

「やめて……」翔が小さく呟いた。

「本当にやめてほしいですか？」

田中の手が翔のシャツのボタンに触れた。翔は答えなかった。沈黙が、彼の答えだった。相手を失望させたくない。その気持ちが、翔の抵抗を封じている。

田中は慎重にシャツのボタンを外していく。翔の白い胸元が露わになった。田中の呼吸が荒くなる。

「美しい……本当に美しい。この白い肌、この滑らかな質感……」

翔の胸筋は、ダンスで鍛えられた適度な発達を見せている。中性的な美しさの中に、確実に男性的な要素が宿っていた。

田中の舌が、翔の鎖骨を舐めていく。翔の身体がビクンと反応した。

「あっ……」

思わず漏れた翔の声に、田中の興奮が高まった。彼の手が翔のズボンのベルトに向かう。

「待って……」翔が田中の手を掴んだ。「本当に、これで……いいんですか？」

「いいんです。翔さんが望むなら」

翔の瞳に迷いが浮かんた。しかし、現実の重みが彼の判断を下した。みんなのために。グループのために。

「……分かりました」

翔の同意を得た田中は、より積極的になった。翔のズボンを脱がせ、その下に隠された美しい身体を露わにしていく。

翔の肌は全身が白く、筋肉は適度に引き締まっていた。アイドル活動で培われた身体は、確実に美しい。そして、彼の股間には、薄いボクサーパンツに包まれた膨らみがあった。

「翔さん……」

田中は翔の下着の上から、その形を確かめるように撫でた。翔の身体が大きく震える。

「んっ……」

田中の愛撫に、翔の陰茎が徐々に反応していく。薄い布の下で、その16センチの美しい形が次第にくっきりと浮かび上がってきた。中性的な美貌とは対照的な、しっかりとした男性の証が、田中の期待を裏切らない。

「感じてるんですね」

「そんな……こと……」

翔の言葉とは裏腹に、彼の身体は正直に反応していた。田中はそれを見て、翔の下着を脱がせた。

露わになった翔の陰茎は、完璧な形をしていた。長さは16センチ、太さも程よく、先端は薄いピンク色に染まっている。そして、既に先走りが滲み出していた。美しい顔立ちに似合う、繊細で美しい男性器だった。

「こんなに美しい……まるで芸術品のようです」

田中は翔の陰茎を手にとった。温かく、脈動している感触に、田中の興奮が最高潮に達する。

「あああっ……」

翔の口から、甘い声が漏れた。田中の手の動きに合わせて、翔の陰茎がより硬くなっていく。先端からは、透明な先走りがとめどなく溢れ出している。

「こんなにも……濡れて……」

田中は翔の先走りを指で掬い、舌で舐めた。

「翔さんの味……」

その行為に、翔の顔が真っ赤になった。

「やめて……恥ずかしいです……」

「恥ずかしがることはありません。これも美しさの一部です」

田中はそう言いながら、さらに手の動きを激しくした。翔の陰茎を根元から先端まで、丁寧に愛撫していく。

「あああっ……だめ……もう……」

翔の声が部屋に響く。田中の興奮がピークに達した。

「翔さん、僕も……」

田中は自分のズボンを脱ぎ、勃起した陰茎を翔に見せた。それは翔のものより一回り太く、20センチ近くあった。先端からは既に我慢汁が垂れ下がっている。

「これを……翔さんに」

田中は翔を押し倒し、その上に覆いかぶさった。翔の身体が田中の重みで沈む。

「舐めてください……翔さんの口で」

田中の陰茎が翔の顔の前に迫った。翔は戸惑いながらも、恐る恐る舌を伸ばした。相手を喜ばせなければ。その思いが、翔を動かしている。

「そうです……もっと……」

翔の舌が田中の陰茎の先端を舐めた。塩辛い先走りの味が口の中に広がる。翔にとって初めての経験だった。

「うっ……」

翔は顔をしかめたが、田中の手が彼の頭を押さえた。

「逃げないで……最後まで……」

田中の陰茎が翔の口の中に押し込まれた。翔の口は小さく、田中のものを受け入れるのに苦労している。

「んぐっ……うぐっ……」

翔の苦しそうな声が、田中の興奮を更に高めた。

「素晴らしい……翔さんの口……最高です」

田中は翔の口を使って、自分の快楽を貪った。翔の口から溢れた唾液が、顎を伝って落ちる。

「もういいでしょう。今度は本番です」

田中は翔の口から陰茎を抜いた。翔は激しく咳き込む。

「痛かったら言ってください」

田中の陰茎が翔の身体の奥へと向かう。翔の表情が苦痛に歪んだ。

「うっ……あああっ……裂ける……」

「大丈夫ですか？」

翔は首を振った。涙が頬を伝う。田中の太い陰茎が、翔の狭い内部を無理やり押し広げている。

「少し……休んで……」

田中は動きを止め、翔の顔を見つめた。翔の美しい顔が苦痛で歪んでいるのを見て、彼は興奮と罪悪感を同時に感じた。

「無理はしないでください」

しばらくして、翔の身体が田中に慣れてきた。内部の筋肉が弛緩し、田中の陰茎を受け入れ始める。

「動いても……いいです……」

田中は再びゆっくりと動き始めた。翔の身体の奥を丁寧に愛撫するように。

「んっ……あっ……」

翔の声が、苦痛から快感へと変わっていく。田中はそれを感じ取り、リズムを上げた。

「翔さん……気持ちいいですか？」

「わから……ない……あっ……でも……何か……」

翔の身体が田中の動きに合わせて揺れる。二人の身体が汗で濡れていく。空気中に、男同士の濃密な匂いが立ち込めた。

「翔さんの中……すごく熱くて……締まってて……」

田中の動きが激しくなった。翔も同じように興奮が高まっていく。

「あああっ……だめ……もう……これ……」

翔の陰茎から、先走りが止まらなくなった。それが自分の腹部に垂れ、粘着性の糸を引いている。

「翔さん……僕、もう……出そうです……」

田中の動きが最後のスパートに入った。翔も限界が近づいている。

「あああっ……だめ……僕も……出ちゃう……」

翔の陰茎が激しく脈動した。そして次の瞬間、白い精液が勢いよく噴き出した。一発目は翔の顔にまで届き、二発目、三発目と胸や腹部を汚していく。

「うああああっ！」

翔の絶頂の瞬間、彼の内部がきゅっと締まった。それが田中の限界を超えさせた。

「翔さん……出します……中に……」

田中は翔の身体の奥で爆発した。熱い精液が翔の内部に大量に注がれる。田中の陰茎が脈動するたびに、新たな精液が送り込まれていく。

「熱い……お腹の奥が……熱いです……」

翔の口からは、恍惚とした声が漏れていた。

二人は激しく息を荒げながら、しばらく動けずにいた。田中の陰茎が翔の中から抜かれると、精液が白い雫となって流れ出てきた。

「翔さん……」田中が翔の額にキスをした。

翔は何も答えなかった。ただ、天井を見つめていた。全身が精液と汗で汚れ、髪も乱れている。その姿は、アイドル時代の清純な姿とは全く違っていた。自分は何をしてしまったのだろう。でも、同時に身体の奥に残る余韻が、新しい感覚を教えてくれている。

それから一時間後、翔は服を着直し、田中から受け取った封筒を握りしめていた。身体の奥にはまだ田中の精液が残っており、歩くたびに違和感があった。

「また……会えますか？」田中が尋ねた。

翔は振り返らずに答えた。「分かりません……」

しかし、彼の声には、完全な拒絶は含まれていなかった。田中はそれを理解していた。

ホテルを出た翔は、夜風に吹かれながら歩いた。封筒の中の現金は、彼の生活を一時的に楽にしてくれるだろう。しかし、同時に、彼の心には新たな影が落ちていた。

それは、表面的な愛想笑いの裏に隠された、もう一つの顔の始まりだった。股間に残る違和感と、口の中に残る塩辛い余韻が、すべてを物語っていた。翔は自分の中に芽生えた新しい感情に戸惑いながらも、これが現実なのだと受け入れようとしていた。

相手を喜ばせたい。傷つけない。そんな翔の性格が、彼を新しい世界へと導いていく。それが破滅への道なのか、それとも新しい可能性なのか、翔にはまだ分からなかった。